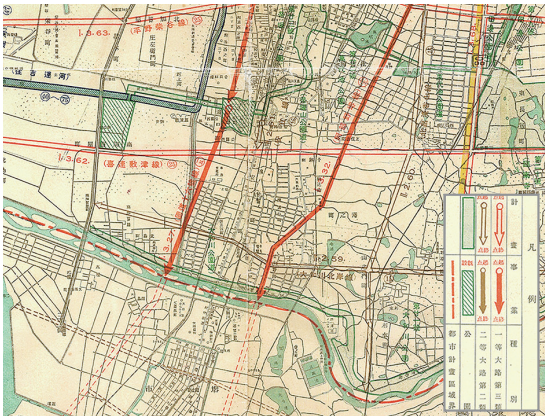


住之江公園誕生

住吉公園の歴史的経過を語るのに住之江公園の誕生を抜きには語れません。公的なものでは大屋霊城氏の「住江公園工事概要」(昭和五年十月)に詳しく記されています。

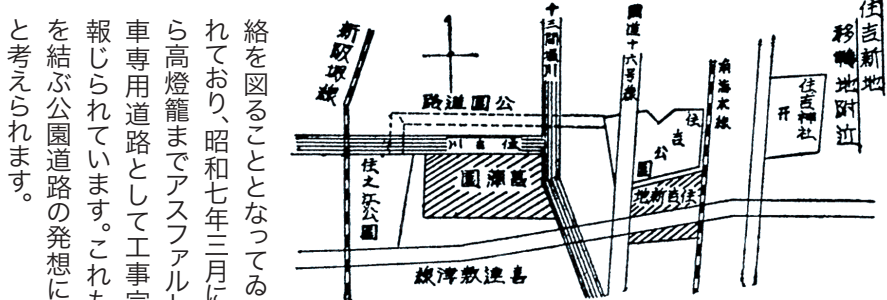
まず、住之江公園が誕生するまでは第二住吉公園や新住吉公園との記載もみられますが、この報告書では「住江公園」の名称が使われています。その誕生の理由は、大阪市―和歌山市間を連結する当該地区の道路、難波住吉線の大阪市界北島町までの延伸です。本道路は当時、国道16号と呼ばれ、「東京市より(現)国道1号經由、大阪で分岐」和歌山県庁所在地に達する路線」であり、大正九年(一九二〇)施行の旧道路法に基づく路線認定で昭和二十七年までの旧十大放射路線にあたり、ご存知、現在の国道26号です。因みにこの路線は、現在の国道24号(当時15号、昭和五年)や国道42号(当時41号、昭和二十年)にも指定されています。



昭和3年(1928)大阪都市計画図(住吉・住之江公園付近)

この道路計画による公園の貫通という事態は、当時、全国の運動公園の先進事例ともいわれたその運動場を廃止せざるを得ない結果であり、その代償としての機能の充実を目的として拡張、新公園が提案され誕生に至ったと記されています。興味深い新公園の規模や位置、またその施設計画については大阪府公園調査委員会に付議されており、大正十四年(一九二五)三月に府議会への報告をもって可決されています。この内容に関しては、大阪府公園OBボランティアの荒木美喜男氏が「住之江公園の建設とその後の経緯について」として資料にまとめられ、府会議事録などの報告に詳しく記されています。

ことから、園内の一部の官有地の払下げを求め、その売却代金を以て住之江公園新設の財源に当てようとした。しかし、この用地取得には府独自に二十万円を公園積立金より、十五万円は一般会計の投入より計三十五万円を計上され、当該新設土地関係者の濱田甚兵衛及び大塚別途会社の協力を得て大正十五年内に用地の買収完了を見ました。また、工費二十五万円については、十五万円が南海鉄道株式会社、六万円は阪堺電気鉄道株式会社の寄付により、その他は公園改良費より支出したとあります。



この図の出典:「住吉新地は菖蒲園へ移転 一ヶ月間の期限つきで 府当局から突如指令」大阪朝日新聞 昭和9年6月2日付

(注)大阪朝日新聞引用箇所の出典
「新公園道路一近く舗装に着手 住吉―住之江南公園」大阪朝日新聞 昭和7年3月10日付
参考文献
八尾修司:近代大阪における公園系統計画の策定過程とその計画思想
京都大学大学院修士論文、2015

ところで、面白い話があります。住吉公園の運動場が廃止され、住之江公園の運動場はプレイフィールドという公園の施設らしい位置づけでした。大阪市には当時、築港の市立運動場があるじゃないかという声もありましたが、大屋霊城氏は、「築港の市立運動場はスタヂウムであって公園ではない。スタヂウムは市のスポーツの代表施設で、それはそれとしてのシンボリックなものであるが、多目的使用のプレイフィールドのような公園施設は一つや二つでも足りぬ。第三、第四、第五の住之江公園といったようなものが必要」と述べています。(繁村誠人)

この図の出典:「住吉新地は菖蒲園へ移転 一ヶ月間の期限つきで 府当局から突如指令」大阪朝日新聞 昭和9年6月2日付
(注)大阪朝日新聞引用箇所の出典
「新公園道路一近く舗装に着手 住吉―住之江南公園」大阪朝日新聞 昭和7年3月10日付
参考文献
八尾修司:近代大阪における公園系統計画の策定過程とその計画思想
京都大学大学院修士論文、2015

発行: 都市公園住吉公園指定管理共同体
(株式会社美交工業・NPO 法人釜ヶ崎支援機構)
お問い合わせ: 住吉公園管理事務所 電話 06-6671-2292

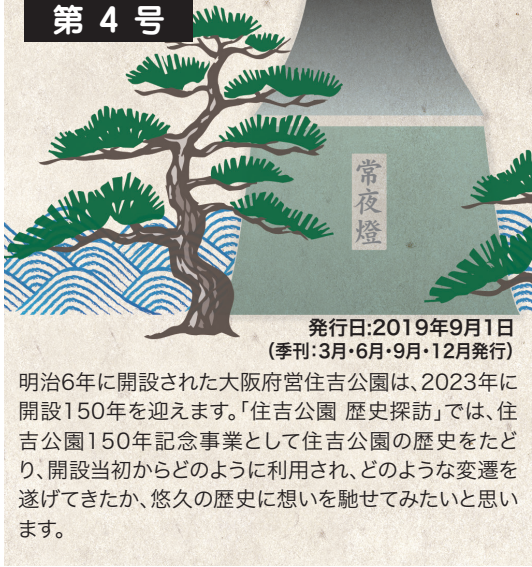
編集委員: 水内俊雄 (代表、大阪市立大学)、小出英詞 (住吉大社)
寺田孝重 (刈田土地改良記念コミュニティ振興財団)
繁村誠人 (NPO 法人 国際造園研究センター)
櫻田和也 (NPO 法人 remo 記録と表現とメディアのための組織)
協力: 八尾修司 (京都大学大学院景観設計学研究室 2014年度修了)
南健志 (大阪府)、荒木美喜男 (大阪府公園OBボランティアの会)

住吉公園一五〇年記念事業

住吉公園

歴史探訪

第4号



発行日:2019年9月1日
(季刊:3月・6月・9月・12月発行)

明治6年に開設された大阪府営住吉公園は、2023年に開設150年を迎えます。「住吉公園 歴史探訪」では、住吉公園150年記念事業として住吉公園の歴史をたどり、開設当初からどのように利用され、どのような変遷を遂げてきたか、悠久の歴史に想いを馳せてみたいと思います。

江戸時代から明治まで、住吉公園が開設した住吉大社旧境内の周辺には、紀州街道を中心にして料理屋・茶屋・土産物屋などがひしめき、大坂や堺への往来客、住吉詣の参拝客を相手にして賑やかに繁昌していました。当時の街道筋は、境内の町屋であった社領新家(現、住吉区長峽町)を中心に、北は住吉新家(現、住吉区東粉浜)、南は安立町(現、住之江区安立)まで町屋が続いていました。その賑やかな様子は十返舎九『東海道中膝栗毛』にも特筆されます。

此ところの名物は、金魚・酢蛤・ごろごろ煎餅・唐がらし・昆布・竹馬糸細工など商ふ家、数多にある中に、料理茶屋は三文字屋・伊丹屋・丸屋なんどいへるが、わきて客の絶え間なく、繁昌ことに云ふばかりなし。

ところが、その繁華街も近代化の波を受けて大きな変化をむかえました。明治十八年(一八八五)十二月の阪堺鉄

道(現・南海電気鉄道)開通や、駕籠から人力車への交通手段の変遷があったため、移動速度が格段に向上したこと、往来客の休憩利用が減ってゆきました。明治二十年代には街道沿いの商店が衰退をはじめ、文楽・歌舞伎の名作『夏祭浪花鑑』や古典落語の『住吉駕籠』などに登場する大料亭は、次々と姿を消してゆきました。

その一方で存続したのは、神社の参道や住吉公園の内外にあった茶屋でした。なかでも壮大な規模を誇ったのは公園西にあった潮湯館です。ちなみに、潮湯とは海水を沸かした風呂のこと、禊祓(みそぎ・はらえ)の信仰と、海水の薬効に基づく湯治法として、古くから堺・住吉で見られた習俗でした。

明治三十一年(一八九八)六月に発行された刷物「住吉御潮湯祓館之図」によれば、住吉大社・住吉公園を背景に、高燈籠に南隣、十三間川に面して潮湯館が構築されており、広大な敷地内には、四階建の楼閣、二階建の回廊式母屋、池や庭園には照明灯が設置されて



『住吉御潮湯祓館之図』明治31年(1898)6月 住吉大社蔵

絵図上方には、生駒山地を背に住吉大社の社殿が整然とならぶ。中央には、街道に平行して松原を横切る線路があり、旧住吉新家にあった住吉ステーションには阪堺鉄道の蒸気機関車「住江」号が煙をあげて停車する。なお、本図発行年の10月1日付で阪堺鉄道は南海鉄道(現・南海電気鉄道)に事業譲渡されたが、奇しくも直前の様子を描いている。下方には、公園の松原中に茶屋とおぼしき建物が散在しており、汐掛道を通じて旧高燈籠と長峽橋、十三間掘川に至る。そして、最も大きく描かれるのが祓館である。域内には潮湯の湯屋と思われる建物のほか、住吉浦の眺望を楽しんだであろう望楼を備えた四階建の高層楼閣、多数の座敷を有する二階建の回廊式母屋があり、松や桜の庭園には照明灯が設置されたモダンな庭園であったことがうかがえる。(小出英詞)

いる様子が見てとれます。ほかにも、公園内に茶屋とおぼしき建屋も数多く画かれています。これから、当時の潮湯館が信仰・健康・遊楽を目的とした大規模レジャー施設であったことがう

かがわかります。なお、発行年は、大坂築港起工式(本紙前号にて紹介記事)の八ヶ月後で、宝之市神事の復興の四ヶ月前にあたり、住吉公園が遊楽地として注目を浴びた時期といえます。(小出英詞)

明治三〇年代の写真から

前回ご紹介した上田貞治郎の写真コレクションのなかに「ナンバ・天下茶屋・住吉」と題字に注記されたアルバム『東南部』があります。このうち、大きく写された印象的な高燈籠の頁には解説文が添えられて、右上の貞治郎自身が撮影した昭和三年（一九二八）の写真では付近の市街化にうまれる様子と対比されていました。

さらに頁をめくると、下段右手から住吉神社の御田および公園内外の写真がならび、松林のなかには茶屋らしき建物がみえます。このうち、明治三十四年（一九〇三）

月三日、カメラクラブ員の集合写真に目をむけると（下段左手の左上）、往時の手提用カメラや中板組立暗函も見えています。緒川直人の研究によると、これは貞治郎（上田文斎の次男）の実兄にあたる野々村藤助が東区南久宝寺四丁目（香料化粧品商（石鹼・ガラス器の製造販売でも有名）「野々村號」経営のかたわら、尚美写真倶楽部 大阪写真倶楽部に所属した時期にあたり、その野外撮影会の様子）がうかがわれます。また境内から十三間堀川あたりの植生も期せずして記録された、貴重な写真かもしれません。（櫻田和也）



【左上から時計まわりに】
大坂住吉高燈籠
南海鉄道創設者松本重太郎銅像 元難波駅前二在リシモノ 住吉駅二移ス 人家櫛比中の高燈炉 昭和三年
住吉高燈籠
住吉公園の西 松林の尽くる処、出見の濱辺に聳へたり。遠望極めて風趣ありしが、現今茶亭や別荘建連り昔の勝景なし。写真は明治三十年頃のものである。
参考文献
緒川直人：アマチュア写真家野々村藤助と明治30年代写真史の再検討
初期大阪写壇を中心に『文化資源学』5: 63-74, 2006.



カメラクラブ員 住吉撮影會 明治34年(1901)3月3日

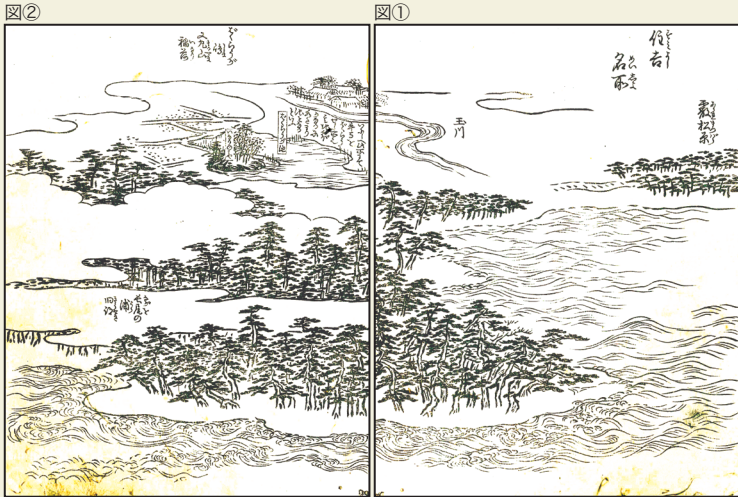
住吉神社 御田

「住吉名所之図」（住吉大社御文庫所蔵 絵本直指宝より）

本図は、住吉大社と周辺の景観を描いた社景図で、江戸中期に活躍した狩野派の絵師、橋守国（二六七九―一七四八）の絵手本集『絵本直指宝』延享二年（一七四五）刊に収録するものです。

近世住吉の社景図には、寛政六年（一七九四）『住吉名勝図会』収載図、同八年（一七九六）『摂津名所図会』収載図、文化十年（一八三三）『摂州住吉宮地全図』などが知られるが、本図はそれらより半世紀以前の刊行になります。

図①から②にかけて、「玉川」（細江川）と神社との間には、丸山稲荷のある古墳（円塚）と「ばくらうが池」（傳勞ヶ池）があり、古く池沼であったことがうかがえます。さらに、現在の住吉公園は海岸の松原あたりになり、名勝「長峽浦（ながおのうら）」の旧跡を示しています。また、図③④⑤は住吉大社や神宮寺ほかの社殿が整然と並んでいますが、図⑥の上方の丘陵には帝塚山古墳とおぼしき「てい王山」と松林「ひめ松」があり、下方の海辺には「かたまがはま（勝間ヶ浜）」という古称が見えており、往時の地理情報を得ることのできる貴重な絵画資料といえます。（小出英詞）



住吉公園の原風景を彩る生物たち
―御田のハマヒエガエリ―



御田植神事の風景 平成24年撮影

住吉大社の創建以来行なわれていたとされている神事に「御田植神事」があります。稲作文化は、縄文時代後期頃には日本に伝来し、それま

でのクリやカシなどを採集し主食とした縄文文化を駆逐して、弥生文化が成立していったとされています。

日本には、「五穀」という言葉があり、「米、麦、粟、稗、豆」を指すとされていますが、一つ異色なものが含まれます。それが筆頭に出る「米」となります。

イネは、元来熱帯地域の植物ですが、他の四種と違って、日本の冬を越すことができます。日本中に水田・陸田がありますが、自力で春を迎えられる雑草化した「イネ」は、温暖化の進んだ現在でもないのです。ですから、イネは人間の手で冬を越す必要があります。伝来して以来ずっと、人の手で管理・保護されてきた珍しい植物となります。そのイネを栽培する水田は、それぞれの時代の植物相を写すものになりますので、大社の「神田」のように神事として、古代より守り続けられた水田の植物相は、非常に貴重なものとなります。

さて、大社は上町台地の海側段丘上にあります。江戸前期の大社の景観がよくわかる『絵本直指宝』の「住吉名所之図」を見ま

すと、大社西側には海が迫っていますが、小河川による陸地化も見られ、海水・汽水淡水が複雑に入り組んでいます。（下絵図③参照）

これが、元禄十七年（宝永元年一七〇四）の新大和川付替工事以降には、多量の土砂の海への流出によって、堺津も住吉の浦も埋められ、北島・南島・加賀屋・萬屋新田が造成される基になり、ついには「咲洲」までが伸び出し、我々が中学の社会で習いました「大阪府は日本で一番面積が小さいけれど、日本を牽引する都市や」と云う誇りを打ち砕いて、面積で香川県を抜いてしまっ

た。このように大社を取り巻く景観は変化しましたが、農耕地と云うのは面白いもので、同じ場所、同じ技法で作られていますと周囲の環境が変化しても変わらない部分が生まれてくるのです。この一典型が「御田」に随伴する雑草群になります。



御田のレンゲ 令和元年



ハマヒエガエリ

平成二十五年（二〇三三）に大阪市立自然史博物館によって「御田」の植物調査が行なわれました。この時に見つかった植物の中に「ハマヒエガエリ」があります。この植物については、調査された長谷川匡弘氏が住吉大社の社報でも紹介されていますが、再度ここで紹介したいと思います。

日本の植物相を表現する言葉に「海浜植物」と云うのがあります。文字通り海岸部でも生育できる植物たちで「ハマアザミ（浜



昭和初期の御田植神事 住吉大社蔵

写真に見られる御田は淡水域にあり、下絵図、図①、②、③の汽水域から淡水域にかけての江戸初期の情景や、右面中段の右上2枚の明治中期の写真の光景とも重ね合わせてみてください。（水内俊雄）

